

この世を愛した者

詩篇1編4～5節

テモテへの手紙Ⅱ 4章9～13節

今日、読み上げました聖書の箇所は、使徒パウロが信仰の息子テモテに宛てた手紙の最後の部分です。

今、パウロはローマの牢に入れられています。釈放される見込みはなく、いつ死ぬか、殺されるか、わからない状況の中で、テモテに「ぜひ、急いで私のところにきてください」言いながら、あれこれ個人的なことを頼んでいます。寒さを感じ外套を持ってくるように、そして書物を持ってくるように、と言っています。パウロはテモテにできるだけ早く、急いでローマに来るように、訴えています。緊迫した響きさえ感じられます。

そのすぐ前のところを見ると、パウロはこのような表現をしています。「私自身はいけにえとして献げられています。世を去るときが近づきました。」ここでの「いけにえ」というのはギリシャ語ではお神酒(みき)を献げるという意味に近いです。旧約で神様に子羊を献げるとき、それを祭壇の上において燃やす前に、ぶどう酒をかける儀式を指しているのです。パウロは自分の死が近づいているのを感じながら自分の血がぶどう酒のように祭壇にささげられるということを示しているのです。殉教を覚悟しています。自分の死が近づいていると感じていたパウロは、最後の日々をテモテと共に過ごしたいと思ったようです。

今の時代とは違って、海山を越えて遠い距離を旅してくるということは、簡単なことではないですが、急いでくるように頼んでいるのを見ると、パウロはどうかテモテに直接会って話したいという思いで褪せているような感じさえします。

その話の中に「デマス」という名前が出ています。「デマスはこの世を愛し、私を見捨ててテサロニケに行ってしまう」。何となく寂しくて心痛むパウロの心情が表れています。

そのデマスという人物はどのような人であったのでしょうか。

フィレモン書24節をみると、パウロはフィレモンに送る手紙の最後の挨拶の中でこのように言っています。「わたしの協力者たち、マルコ、アリストアルコ、デマス、ルカからもよろしくのことです。」ここに「デマス」の名前が出ています。使徒パウロがデマスを私の協力者と呼んでいるのを見ると、デマスはパウロの伝道活動を助ける貴重な人物であったのに違いありません。

また、コロサイの信徒への手紙4:14には、「愛する医者ルカとデマスも、あなた方によろしくと言っています。」と書かれています。このときもデマスはパウロと共にいたのが分かります。デマスはパウロの第一伝道旅行で、パウロと共に苦勞をしながら福音を宣べ伝えていました。二次伝道旅行のときも初めのころはパウロと共にいました。しかし、使徒パウロが死を前にしている最も辛くて暗い時間、デマスはパウロを捨ててどこかへ去ってしまいました。その理由は「この世を愛した」からでした。今、パウロだけが冷たいローマの牢の中に残されています。

もしかしたら、デマスは続く苦難の日々中、ある日、突然耐え切れない気持ちになったかも知れません。あるいは、いつか自分もパウロのように、牢に入れられ、むち打ちされ、惨めな死を迎えるかもしれないという不安に襲われたかも知れません。あるいは、世の中の人たちの生き方が自由で幸せに見え、魅力ある生活のように思われ、彼の心がひかれたかも知れません。あるいは、世の

人の哲学や理念の前に、この世の権力の前に、十字架の道があまりにもみすぼらしくて、ちいさなものに見え始めたかも知れません。あるいは、このようにも考えてみるのです。デマスは必ずしもキリスト教を完全に捨てたとは言いきれないかも知れない、デマスは自分自身の個人的な都合や自分の身の安全を優先したくなったかも知れない。苦難を選ぶより、楽で、ほどほどの信仰生活で妥協したくなったかも知れないのです。彼は、この世を愛してパウロから離れました。パウロのこの言葉には、寂しさと痛みがこもっているように聞こえます。

デマスはパウロと共にいる時間がいやになりました。パウロと共に味あわなければならない、ひもじい時間と寒さ、人たちに蔑視され、いつ死ぬかわからない恐怖が、彼にして耐えない気持ちにさせたのではないかと思われるのです。世の中の人たちのように楽な生活が恋しくなりました。世のすべてが新鮮で魅力に満ちている世界に見えたのです。飲み、食べ、酒に酔い、恋をし、別れる、そのような人間の業が恋しくなり、主イエスの存在が消えてしまったのです。彼はこの世を愛し、パウロから去って行きました。

しかし、パウロは福音のため、試練の中にながらも、愛する人たちから捨てられ、寒さと寂しさの中にながらもこのように言っています。「わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました。いまや、義の栄冠を受けるばかりです。正しい審判者である主が、かの日にそれを私に授けてくださるのです。しかし、私だけではなく、主が来られるのをひたすら待ち望む人には、だれにでもさずけてくださいます。」

パウロはこの世のすべてがいかにもむなしなものであるかを知っていました。彼はこの世の終わり、義なる審判者、主イエス・キリストを仰ぎ見ていました。そして、信仰の戦いを貫いてきた人たちに与えられる義の栄冠が必ずあることを信じていました。この世を越えて存在している神の国を見ていました。「神がかならず存在していること、神はご自分を求める者たちに報いてくださる方であることを信じて（ヘブライ 11:6）」いました。

一人子イエス・キリストを私たちのために送ってくださったその限りない神の愛と、私たちのために十字架で死んでくださった主イエスの贖いの恵みを、パウロはいつも見ていました。神様は必ず存在し、苦難の中にも必ず共におられることを信じていたからです。そして、神様を信じるものは死んでも永遠に生きるということを知っていたからでした。パウロはそのような信仰があったので、この世を愛することが出来ませんでした。パウロの、死を前にしていながらも信仰の確信に満ちているこの告白は、私たちに多くの感動を与えてくれます。それと共に、この世を愛した者、デマスに対して残念な気持ちが湧き上がります。

詩篇記者は、神に逆らう者を風に吹き飛ばされるもみ殻にたとえています。この世の風に吹き飛ばされ、揺れ動く、空しくさまようものになるのです。神に従う集いに耐えられなくなり、神の裁きを招くことになるのです。パウロを離れたデマスの心に平安があったのでしょうか。この世を愛しながら主に喜ばれることができるのでしょうか。

私たちは決してデマスのようにこの世を愛する、この世に惑わされる者にはなりたくないのです。パウロのように、どのような困難の中でも、苦しみがあっても、信仰の戦いをりっぱに戦い抜いて、義の栄冠を受けることができる勝利者になりたいのです。